

主 題：主を恐れる

聖書箇所：黙示録 1章17－20節

黙示録1章17節から見ていきましょう。「それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。」。大きな声がするので振り向いたヨハネ、そこに見たのは主イエス・キリストでした。その様子が私たちがこれまで学んで来た箇所に記されていました。

◎ヨハネに示された幻

- 1) 七つの金の燭台 12節
- 2) 人の子 13節
- 3) 人の子・主イエスに関する八つの直喩 13－16節
- 4) 主の慰め 17－18節

よみがえった主を見た時に、ヨハネは足もとに倒れて死者のようになったと言います。彼の心は大変な恐れで満たされたのです。なぜ、彼は主を見た時に恐れたのか？もちろん、彼が見たのは聖い正しい神であり、その神の前に自分が立っていることに気づかされ、そして同時に、自分がいかに罪に汚れた存在であるかということが明らかにされたからです。

このような経験をしたのは彼だけではありません。旧約聖書の中を見ても神を見た人たちは神に対して大変な恐れを抱いています。たとえば、サムソンの父であったマノアは「それで、マノアは妻に言った。「私たちは神を見たので、必ず死ぬだろう。」（士師記13：22）と言っています。この方は余りにも聖いお方であり、私たちはその神の前に立つことができるような聖い正しい者ではない。ですから、人々は神に対する大変な恐れを持ちました。預言者イザヤもそうでした。イザヤ書6：5に「そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の【主】である王を、この目で見たのだから。」と書かれています。彼も同じように神を見た時に神に対する恐れを持っています。出エジプト33：20にも「また仰せられた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」と、モーセに対して主はこのように仰せられました。ヨハネだけではなく、ヨハネと同じように信仰の勇者たちはこのように神に対する恐れを持っていました。

恐らく、皆さんもお気づきだと思います。私たちの信仰は、私たちが神を正しく知れば知る程、本当の自分が正しく見えて来ます。完全に聖く罪汚れのない神を知れば知る程、自分がいかに罪深く不完全であるかが、まさに、自分を姿見で見るように見えて来ます。その時に私たちは神を恐れるのです。いったい、私はこの神の前に立ちおおせることができるのか？なぜ、私のような者がこの聖い正しい神の前に立つことができるのか？と。

死者のように主の足もとに倒れたヨハネに声をかけたのは、主イエス・キリストでした。17節を見ると、「…しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。」と、イエスは右手をヨハネの上に置いて「恐れるな。」と言われました。この「恐れるな」は現在形が使われています。つまり、イエスはヨハネに「恐れるのを止めなさい。恐れているのを今すぐ止めなさい。」と言われたのです。マスターズ神学校のギリシャ語の権威トーマス先生は「これはヨハネに慰めと保証や確約をもたらす行為である。」と言います。イエスがヨハネの上に右手を置いたこの行為は、ヨハネに慰めと保証や確約をもたらすものであるというわけです。だから「恐れるな」と言われたのです。

実は、このような経験、イエスが自分に触れて「恐れるな」と言われた経験は、ヨハネにとって初めてではありませんでした。ヨハネはこれと同じようなことをもうすでに、約60数年前に経験していました。それは「山上の変貌」でした。マタイの福音書17章に出て来ます。天から声を聞いた時に三人の弟子たちは驚きました。いや、恐れしました。ペテロとヤコブと、そして、このヨハネです。マタイ17：6、7「弟子たちは、この声を聞くと、ひれ伏して非常にこわがった。すると、イエスが来られて、彼らに手を触れ、「起きなさい。こわがることはない」と言われた。」と、そのときもイエスが来られて声をかけてくださったのです。そのときもイエスが彼らに触れてくださって「こわがることはない」と言われたのです。まさに、ヨハネはこの時と同じような経験をするのです。

☆「慰めの主」 17, 18節

「私たちの主は慰めの主である」と、実は、そのことがここに記されているのですが、恐れて主の足もとに倒れて死者のようになったヨハネを、イエスはどのようにして励まされたのか？興味深いことは、

イエスはここで、いろいろなことばをもって励まされたのではないことです。主はここで「ご自分がいかに偉大な神であるか」ということをヨハネに示されるのです。恐れていたヨハネにイエスがなさったことは、ご自身がどんなに偉大な神であるかということをはっきりとすることでした。そこで5つの真実を教えられています。

◎主がヨハネに教えられたこと

(1) 約束を守られる真実なお方 17節

17節の続きに「わたしは、最初であり、最後であり、」とあります。日本語ではこのように訳さなければならなかったのですが、ここでは「わたしは、ある」－「I AM」と言われています。これはまさに、モーセが神に「あなたのお名前は何ですか？」と問うた時に、神ご自身がお答えになったことでした。出エジプト記3：14、15「14 神はモーセに仰せられた。『わたしは、『わたしはある』という者である。』また仰せられた。『あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた』と。』と。

「わたしは、『わたしはある』という者である。」と、それは「自存の神」ということです。だれに依存することなく存在しておられるお方、だれの助けも必要としないお方です。だれから養ってもらい必要もない、この方はご自分で存在している神だということです。イエスがヨハネの福音書の中で繰り返して「わたしは〇〇である」と、ギリシャ語で「エゴ・エイミ」と言いますが、繰り返してそのように言われたのは、「あの旧約の神が実はわたしなのだ。わたしが神なのだ。」ということをして、人々の前に明らかにされたのです。

それだけでなく、この出エジプト記3：15のみことばを見ると「神はさらにモーセに仰せられた。『イスラエル人に言え。あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、【主】が、私をあなたがたのところに遣わされた、と言え。これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である。』とこのように神はモーセに命じるのです。ここには「【主】が、私をあなたがたのところに遣わされた、」と記されています。この【主】とは神の名として旧約聖書に最も多く出て来る名前【ヤーウェ】です。6826回も出て来ます。

なぜ、ここに「アブラハム、イサク、ヤコブ」という名前が出て来ているのか？この【ヤーウェ】とは「契約の神」のことを言います。イスラエルとの関係において、この「主なる神は約束されたことを必ず守り行うお方である」、今もこれから後も、主は神であり変わることがないと、そのような意味を持った名前です。ですから、「主」と言われたときにそれは「わたしは約束されたことを必ず守るし、わたしは永遠から永遠に変わることのない不変の神である。」と言っておられるのです。

民数記23章に、預言者バラムがモアブの王バラクに神のメッセージを伝えます。23：19「神は人間ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いることがない。神は言われたことを、なさないだろうか。約束されたことを成し遂げられないだろうか。」と、つまり、「神は言われたことを必ずなさる、神は約束されたことを必ず成し遂げられるお方、それが神だ。」と、預言者バラムがこのように神のメッセージを伝えます。また、マラキ3：6にも「【主】であるわたしは変わることがない。ヤコブの子らよ。あなたがたは、滅ぼし尽くされない。」とあります。

感謝だと思いませんか、皆さん？私たちの神は約束を必ず守られるお方だ、私たちとともにいてくださり、私たちから決して離れることがないと。この読者たちは大変な迫害を経験していました。神は言われるのです。「わたしは約束を必ず守る。」と。

まず最初に、主がヨハネに教えるのは「わたしは約束を守る真実な神だ」ということです。

(2) 主権者であるお方 17節

⇒主は永遠に存在しておられるお方である

「わたしは、最初であり、最後であり、」と、これは「主権者なる神だ」と言われたのです。主権者であると。神はご自分の意志をもって、ご自分の考えをもってすべてを統べ治めておられるお方です。すべての王であり、すべての主である、それが「わたしだ」と言われるのです。この「わたしは、最初であり、最後であり、」というこの意味は、8節でイエスが「わたしはアルファであり、オメガである。」と言われたことと同じです。つまり、主なる神は永遠に存在しておられるお方であると、そのことはすでに学びました。

⇒主は、この世のすべてを支配しておられるお方である

もう一つ、「最初であり、最後である」とは「始まりがあり、終わりがある」とするなら、これは被造物のことです。なぜなら、神には初めもないし終わりもないからです。神は時間を超越しておられます。人には始まり、すなわち、誕生があり、終わり、すなわち、死があります。この世界には始まり、神の創造があり、終わり、滅びがあるのです。ですから、主なる神が「わたしは最初であり、最後であ

る」と言ったとき、それはその始まりから終わりまでのすべてのことを指していて、そして、その間のすべてのことを神がご存じあるということを使うのです。つまり、主はこの世の歴史を支配しているということです。始まりから終わりまでのすべてのことを、歴史を支配していると。説明しましょう。

実は、イザヤ書 44 章に、今私たちが見ている「初めであり終わりである」というフレーズが出て来ます。44:6「イスラエルの王である【主】、これを贖う方、万軍の【主】はこう仰せられる。「わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はない。」、また、48:12にも「わたしに聞け。ヤコブよ。わたしが呼び出したイスラエルよ。わたしがそれだ。わたしは初めであり、また、終わりである。」とあります。同じフレーズが出て来ています。大切なことは、神はどのような背景の中でこのように言われたのか？ということです。実は、44章では、主がイスラエルを守り、敵から救い出されることを約束して「わたしは初めであり、わたしは終わりである。」と言われたのです。48章では、敵であるバビロンに対しても、主はご自分の計画を果たされることを約束されるのです。48章12-15節に書かれています。「:13 まことに、わたしの手が地の基を定め、わたしの右の手が天を引き延ばした。わたしがそれらに呼びかけると、それらはこぞって立ち上がる。:14 あなたがた、みな集まって聞け。だれがこれらの事を告げたのか。【主】に愛される者が、主の喜ばれる事をバビロンにしむける。主の御腕はカルデヤ人に向かう。:15 わたしが、このわたしが語り、そして彼を呼んだのだ。わたしは彼を来させ、彼の行うことを成功させる。」と。

なぜなら、この世界のすべてを支配しておられる主は、すべてのことをご自分の計画に沿って行う権利があるということです。つまり、神は私たちから何かを言われてされるのではない、神はすべてのことをご自身の計画に基づいてされているお方だということです。「わたしは初めであり、わたしは終わりである」ということは、過去においても現在においても未来のすべて、すなわち、歴史の初めから歴史の終わりまで、世界の始まりから世界の終わりにおけるすべてのことを指しているのです。主はそのすべてを支配しておられる、その事実をもって、この迫害下にいた人たちに対して「あなたの身に何が起ころうと、すべてのことをわたしは知っている。そして、すべての背後にはわたしの完全な計画がある。だから心配しなくていい。」と言われたのです。

私たち信仰者も感謝です。日々いろんなことが起こって来ます。予期せぬことがたくさんあります。悲しいこともあります。私たちが驚くのはそのようなことが起こることを知らなかったからです。みことばが教えるのは、神はそのすべてのことをご存じだということです。だから、神なのです。主がヨハネに言うことは「わたしは主権者だ。すべてのことはわたしの考え、わたしの意志に基づいてなされるのだ。その権利がわたしにはある。なぜなら、わたしは神だから。」です。

(3) いのちの源である 18節

18節の初めに「生きている者である。」とあります。つまり、「主なる神はいのちの源である」と言われたのです。「生きている」という動詞も現在形を使っています。神は生き続けておられる方、永遠に存在される方であると。

・主なる神は「生ける神」である

旧約聖書を見ると、もちろん、新約聖書もそうですが、人々は神のことを次のように呼んでいます。「生ける神」と。ヨシュア記 3:10「ヨシュアは言った。「生ける神があなたがたのうちにおられ、あなたがたの前から、カナン人、ヘテ人、ヒビ人、ペリジ人、ギルガシ人、エモリ人、エブス人を、必ず追い払われることを、次のことで知らなければならない。」、詩篇 42:2「私のたましいは、神を、生ける神を求めて渴いています。いつ、私は行って、神の御前に出ましょうか。」、新約聖書の中の一つを思い出してください。ペテロたちがイエスから質問されました。マタイの福音書 16:13-16「:13 さて、ピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々は人の子をだれだと言っていますか。」:14 彼らは言った。「バプテスマのヨハネだと言う人もあり、エリヤだと言う人もあります。またほかの人たちはエレミヤだとか、また預言者のひとりだとも言っています。」:15 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」:16 シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」、ペテロは「キリストです」とは言わなかった。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と言いました。生きておられる方だと。

他にも、使徒 14:15「言った。「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。」、マタイ 26:63「しかし、イエスは黙っておられた。それで、大祭司はイエスに言った。「私は、生ける神によって、あなたに命じます。あなたは神の子キリストなのか、どうか。その答えを言いなさい。」

⇒主はご自分と偶像とを対比しておられる

なぜ、そのような表現を使ったのか？なぜ、そのように神を説明しているのか？これが、この神と、神と名乗る偶像との決定的に違うところだからです。真の神にあって偶像に無いものは何か？それは

「いのち」です。生きているかどうかが偶像と真の神の決定的に異なるところです。この主なる神にはいのちがある、だから、いのちを与えることができます。なぜ、私たちはこの神に永遠のいのちを求めるのか？この神が永遠のいのちを持っているからです。持っているから、この方は求める者にいのちを与えることができます。どうしていのちのない偶像が人を慰めることができますか？いのちのない偶像がどうしていのちを保証できますか？いのちのない偶像がどうして悩みの中にいる人たちを励ますことができますか？どうして偶像が人を理解してくれることができますか？私たちの悲しみや痛みを…。目があっても見ることはできない、耳があっても聞くことはできない、口があっても話すことはできない、手があっても助けることはできない偶像が、どのようにして助けることができますか？

聖書が教えるこの神は、私たちに何が必要かをご存じであり、そして、一番大切なこの「罪の赦し」を与えるために人として来てくださって、そして、私たちに罪の赦しを与えてくださったのです。この方だけが私たちの必要を満たすことができます。この方だけが私たちを励まし、慰めることができます。パウロはこう言います。ローマ 15 : 5 「どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようになさいますように。」と。パウロは「私たちの神は励ましを与えることのおできになる神だ」と言うのです。だから、神のことを「励ましの神」と言っています。ヘブル 4 : 15 には「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」とあります。私たちの大祭司であるイエスは、あなたの弱さに同情できない方ではない、ちゃんと弱さを分かってくださるというのです。私たちの弱さを理解し、それに必要な助けを備えてくださる方だと言います。

なぜでしょう？この神は生きておられるからです。この神は今も生きておられ、私たちのすべてのことを見ておられ、すべてのことをご存じです。だから、イエスはヨハネに対して「わたしは生きている。わたしにはいのちがある。」と言われたのです。

(4) 死に勝利したお方 18 節

18 節「わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。」、

・「わたしは死んだ」 : 「死んだ」という動詞が意味するのは、実際に、イエス・キリストは一度死を体験されたというその事実を述べているのです。イエスは十字架で一度私たちの罪のために死んでくださった。ペテロのことばを借りるなら、「キリストも一度罪のために死なれました。」(I ペテロ 3 : 18)、ご自身の罪のためですか？イエスは何か悪いことをしてその償いとして十字架で死んだのですか？いいえ、ペテロのことばは「正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。」と続きます。イエスは確かに十字架で死なれました。でも、それはご自身が犯した罪のためではなくて、罪のない正しいイエスが、罪ある私たちの身代わりとなって死んでくださったのです。あの十字架の死は我々の身代わりだったということです。確かに、聖書は私たちに、主イエス・キリストは一度、私たちの罪を負って身代わりとなって死んでくださったことを教えています。

・「見よ」 : このことばは感嘆詞です。このことばを入れることで特別な注意を促しています。

・「いつまでも生きている」 : そして次のことばへと続きます。「今は生きている。いつまでも生きている。」と言われたのです。実は、この「いつまでも」と日本語で訳されていることばは一つのギリシャ語からなっているわけではありません。幾つかのギリシャ語からなっています。このことばは新約聖書の中に 20 回出て来ます。あるところでは「とこしえ」「代々限りなく」と、また、別のところでは「永遠に」と訳されています。もし、このことばを直訳すると「いつまでも、いつまでも」となります。つまり、*死を味われた主が今は生きておられるということを強調している！ のです。

確かに、この方は十字架で死なれたけれども、しかし、いつまでも、いつまでもこの方は生きておられると言うのです。私たちは主イエス・キリストが十字架の後、三日後にその死からよみがえって来られたことを知っています。もう、主イエス・キリストには死は訪れません。一回の死によって人間の罪の贖いを完成されたからです。もう二度とイエスは十字架に掛かる必要はないのです。主はよみがえりの主であって、再び死ぬことがない。そして、復活によって主は死に勝る力をお持ちであることを明らかにされたのです。死からよみがえられたイエスはいつまでもいつまでも生きておられるのです。

このことによってイエスは、私たちがどうすることもできないこの死という大敵に対して、完全に勝利されたのです。なぜ私たちは「死んでも生きる」とそのように確信をもって言えるのか？「たとえ、私の肉体が滅んでも、墓に入ったとしても、私はイエス・キリストとともに永遠を生きる」と、そのように確信を持って言えるのはどうしてか？主イエス・キリストは私のために死に、よみがえって、いつまでもいつまでも生きておられるからです。死に打ち勝たれた方がその勝利を信じるあなたにも私にも与えてくださったのです。

ホセア書 13 : 14 「わたしはよみの力から、彼らを解き放ち、彼らを死から贖おう。死よ。おまえのとげ

はどこにあるのか。よみよ。おまえの針はどこにあるのか。あわれみはわたしの目から隠されている。」と、ホセアはこうに言っています。神が私たちをその死から贖ってくださった。「死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」、パウロはこのことばを引用しています。Ⅰコリント15：55「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」と。神は完全にこの死に勝利された方です。

(5) 生死を司るお方 18節

そして、最後五つ目は18節の後半「また、死とハデスとのかぎを持っている。」、この神は「生死を司るお方である」と言います。「生きる」「死ぬ」を司るお方です。

***「かぎ」ということばは「権利や権限」を表わしています。**

たとえば、扉を開けたり閉めたりするためにはかぎが必要です。主はかぎを持っていると言われるのです。どこのかぎか？「死とハデスのかぎ」と書かれています。「ハデス」とはいったい何なのか？このハデスとは「不正な者が肉体的に死んでから復活までの間留まる場所」のことです。神を信じていない人が、肉体的な死を経験し、最後の時によみがえって神の前で審判を受ける、その時まで留まっている場所、それがこのハデスです。ここで主が「死とハデス」と言われたのは、どちらも同じことを違う表現で表わしたとも言えます。というのは、「死」とは「その人の置かれている状態」を表しています。「ハデス」とは「その人が行った場所」を指しています。

このことから、イエスはヨハネに、ご自身には「人の死に関してそれを取り決める権利がある」と言われたのです。また、生きることにしても同じです。人間の生と死、それはすべて神が司っているということです。これは迫害されているクリスチャンにとって大きな励ましになりました。彼らは非常に恐れて「もしかすると、次には私の首がはねられるのではないか…」と恐れを抱いていたでしょう。でも、イエスは「確かに迫害はある。確かに多くの人たちは殉教していった。でも、心配しなくていい。人間の生きることも死ぬこともすべてわたしの御手のうちにあるから。」と言われたのです。

私たちは今日偶然生きているわけではありません。主があなたを生かしてくださっているのです。私たちが知っていることは、もしかすると、神はこの地上での生活を「これまで」と言われて神のもとに召してくださるその日が近くやって来るかもわからないということです。でも、私たち信仰者はある面でその日を待っています。願わくは、肉体的な死を経験することなく、主が私たちを迎えに来てくださって天に迎えてくださること、そのほうが良いなと思っています。でも、いずれにしろ肉体の死を経験してか、肉体的な死を経験しないかに関係なく、私たちはみな主のもとに上がって主とともに永遠を過ごすのです。

皆さん、私たちは明日も生きることができるか？とか、後何年生きることができるか？とか、そんなことを心配しなくていいのです。世の人はそれを心配しなければいけません。もちろん、私たちにもからだに対する責任があります。でも、「いのち」はすべて神の御手のうちにあるのです。あなたが心配することではないのです。どれだけ長く生きるか？それは私たちの心配事ではありません。私たちが考えるべきことは、与えられたこの日をどのように生きるかという責任です。私たちは後何年生きるかということを一生涯懸命心配してもし今日を過ごしているなら、それは悲しいことです。私たち信仰者はそのことは神の御手のうちにある、でも、この日をくださった神の前に責任を持っているから、この日をどのように生きて神を喜ばせるか、そのことを考えて生きるのです。

イエスはここで「わたしは人間の生も、そして、死もすべてを司っている。だから、心配しなくていい。」と言われました。今、世の中は大変です。自然災害があちこちに起こっているし、私たちの周りにいつテロが起こるかも分からない。でも、私たち主によって贖なわれた者たちは違います。今見て来たように、すべてことは神が支配しておられる、私たちのいのちでさえもすべて神の御手のうちにある。この日をしっかり生きることです、皆さん。感謝を持って喜びを持って主のみこころに従って生きることです。また明日が与えられたらそのようにして生きていくのです。

こうして、主イエス・キリストの足もとに倒れて死者のようになったヨハネに対して、イエスがなさったことは、ご自分がどんなに偉大な神であるのか、そのことを5つ話されました。この真理をもってヨハネを励まそうとしたのです。あたかも、イエスはヨハネに対してこういうことを言われたようです。「ヨハネよ、恐れなくていい。わたしは神だ。あなたは自分の汚れを知りわたしを恐れているが心配しなくていい。わたしはあなたに罪の赦しを与えてあなたを聖くしたのだ。死に勝利し生死を司るわたしがあなたに永遠のいのちを与えたのだ。」と。主を恐れていたヨハネを慰め、励ましたのは「この偉大な神によって自分は受け入れられたのだ」という事実です。こんな罪深い私、こんなどうしようもない不完全な私、こんな私を主は愛して赦してくださり、主はご自身のうちに受け入れてくださった。このことが彼を励ますのです。

なぜ、そのように言えるのでしょうか？もう一度見てください。恐れを抱いていたヨハネに対して主が

何をなさったのか？ご自分の右手をヨハネの上に置かれて「恐れるな。恐れるのを止めなさい。」と励まされたのです。イエスはそうになさった。なぜ、恐れるのを止めるべきなのか？それは「わたしがあなたを受け入れたのだから、今、あなたはわたしの前に立つことができるのだ。もう恐れなくていい。偉大な神であるわたしがこのことを約束しているのだから。」と言われたからです。

マスターズ神学校のトーマス先生のことばを最初に言いましたが、この主イエスのなさったことは、ヨハネに「慰めと保証や確約をもたらす行為であった」と。イエスが手を置かれて声をかけられた、これはヨハネに慰めや保証を与えるためだったと言うのです。こんな罪深い私を神は赦してくださった、こんな私を受け入れてくださった。神の前に立つことができる者へと私を造り変えてくださった。ヨハネの心の中には、当然、この神に対する恐れだけでなく、大変な感謝もあったでしょう。赦されたことを知るとはそういうことです。これは驚きでしょう！皆さん。なぜ、神がこんな私を選び、こんな私にこのようなすばらしい救いを与えてくださったのか？なぜ、こんな私がこのような恵みをいただいているのか？…。でも、そのレッスンを学んでから神は何をなさるのか？今度はその上で、ヨハネに対して務め、働きを与えるのです。

5) 主からの務め 19-20節

19節「そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書しるせ。」、ヨハネの責任、彼の務めがここに記されています。「あなたの見た事」とは「彼が幻を通して見てきた過去のこと」です。1章10-16節に書かれていました。「今ある事」とは「現在の事」で、それは2-3章に書かれています。「この後に起こる事」は「未来の事」で、4-22章に記されているのです。

当然、神によって「恐れるな」と言われたヨハネはこの神のメッセージを正確に記して、そして、そのメッセージを人々に伝え続けたでしょう。なぜなら、こんなすばらしい神にこんな私が赦され、受け入れられたということを改めて知った時に、当然出てくる応答というのは、どのようにしてこの神を喜ばせるかという、その思いが出て来るからです。

ですから皆さん、この出来事を通してヨハネは非常に大切なことを学ぶのです。それは「心を常に正しく保ち続けていく」ということです。なぜなら、心が正しくなければ正しい働きが出て来ないからです。ヨハネがこの神からの大切な務めを果たしていくためには、まず、彼の心が整えられる必要があったからです。ヨハネは正しかったのです。神を見た時に恐れを抱きました。でも、その恐れを抱いていたヨハネを神は「わたしはあなたを受け入れる」と言って彼を迎えてくださったのです。正しい心を持ったヨハネは、その正しい心をもってこの後神に仕えていくのです。もちろん、それまでも彼自身はそのような正しい思いを持っていたことは間違いありません。

20節に「わたしの右の手の中に見えた七つの星と、七つの金の燭台について、その秘められた意味を言えば、七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。」とあります。すでに、見て来ました。つまり、主イエス・キリストはご自分が建てられた教会の中で働きをしておられるということです。それはもう何回も見て来ました。主がそのような働きを為しておられるなら、その教会に属している私たちにも当然責任があるのです。主に喜ばれる教会を建て上げていくという責任です。私たちのこの地上における教会が神に喜ばれる教会として成長していくことです。どうすればいいのか？それは「あなたが神に喜ばれる人として成長すること」です。あなたの心の中が常に神の前に正しい状態に保たれていること、あなたの為すことのすべてが正しい動機をもって主に仕えているなら、主はあなたを大いに祝してくださり用いてくださる。

だから、そこに戻っていくのです、皆さん。神はご自分が建てられた教会を益々ご自身の喜ばれるものにしようと変えられていきます。私たちも当然それを覚えて私たちの責任を果たしていくことです。そのために、私たち自身の心が常に神の前に正しくなければいけません。私たちには神に対する正しい恐れが必要です。ヨハネがそのことを学んでいくのです。たとえ、正しい働き、つまり、奉仕や教会の働きや行事、集会に積極的に参加すること、伝道する、献金することなど、いろんな正しい働きがあります。でも、そのようなことにどれ程あなたが熱心であったとしても、主の関心は、あなたの為しているその正しい働きが、正しい心から出ているかどうかです。神の関心はあなたが何を為すかではなくて、どのような心をもってその働きを為しているかです。あなたの熱心さを見て、人々がたとえあなたを称賛したとしても、もし心が正しくなければあなたの心を見ている神はお喜びになりません。

ですから、神が喜ばれる正しい働きは正しくない心からは生まれません。私たちがしなければいけないことは、自分の心がいつも神の前に正しいかどうか自分の心を吟味することです。

☆そして、「主なる神に対する正しい恐れ」が必要

この方は神なのです。その方を正しく恐れることです。

例を一つ挙げて今日を終わりたいと思います。ヘブル人への手紙12章をご覧ください。28, 29

節です。「:28 こういうわけで、私たちは揺り動かされない御国を受けているのですから、感謝しようではありませんか。」と、先ず、この著者は「私たちクリスチャンは神からすばらしい祝福をいただいている」と言います。それは「御国を受けている」、天国のことです。しかも「揺り動かされない御国を」とあります。つまり、この約束は確実に主イエス・キリストを信じるあなたに与えられているということです。この約束の確実性をここでこのように述べているのです。主イエス・キリストの救いに与ったあなたには、天国が確実に約束されていると。そして、その約束、祝福の後に「感謝しようではありませんか。」と書かれています。これが祝福をいただいたことを覚えた人の祝福をくださった神に対する正しい応答です。こんなすばらしい祝福をくださった神にどう答えていくのか？「感謝しなさい」と言われています。しかも、その後に、この感謝を表す二つの具体的な生き方が書かれています。28b-29節「こうして私たちは、慎みと恐れとをもって、神に喜ばれるように奉仕をすることができるのです。:29 私たちの神は焼き尽くす火です。」

◎その感謝を日々どのように現わしていくのか？

(1) 神を神として崇めること

「慎みと恐れとをもって」と書かれています。神を敬う気持ちをもって、神を心から恐れるそのような思いをもって神の前を歩み続けていく、それを失ってはならないということです。いつの間にか私たちは、神である方を私たちの次元に引き降ろしてしまっています。神は確かに私たちを「友」と呼んでくださった。でも、この方は神です。この方に関するみことばを見る時に私たちが覚えるべきことは、この方は神であってこの方は私たちが恐れるべきお方であるということです。ヨハネもそうでした。イザヤもそうだったのです。

(2) 神に仕えること

「神に喜ばれるように奉仕をすることができる」とあります。つまり、神に感謝している人は、この神のためにもっと生きていこう、神のために何でもしていこう、そのように生きて、そのように感謝を表すのだとこの著者は教えてくれるのです。

これから話すことは皆さん良くご存じだと思います。なぜなら、皆さんはそのことを経験されているからです。それは、主を喜ばせること、主がお喜びになることをしている時が、実は、あなたにとって一番嬉しいとき、一番喜んでいる時ではありませんか？ということです。私たちは一生懸命自分を喜ばせようとしませんが、一番いい方法、一番正しい方法は何でしょう？ 神を喜ばせることです。神に喜ばれることをやっているとき私たちの心も喜んでいきます。違いますか？そのことを皆さんは経験されているでしょう。

でも、もし、私たちが自分を喜ばせようとするなら、神が喜んでおられないだけでない、実は、自分自身も喜べないのです。なぜなら、喜びというのは神のギフトだからです。神を喜ばせているなら私たちはそのすばらしい祝福をもって生きることができるのです。

このヘブル書の著者は私たちに「神に喜ばれるように奉仕をすることができる」と言いました。神からすばらしい天国という祝福をいただいた、救いをいただいた、そのことを感謝している人たちは、神が喜ばれることをしていきたいと思うのです。それが私たちクリスチャンです、皆さん。私たちは生まれ変わった者として新しい目標をもって生きます。それは、どうすればこの神を喜ばせることができるかです。なぜなら、主の前に立った時に問われるのはそのことだけだからです。どんな働きをしてどれだけの収益を得たか？神はそのようなことは一つも私たちに問われません。問われることは「わたしに対してあなたはどのように生きたか？わたしのみことばに従って来たか？」です。神が喜ばれることを私たちは喜びながら実践して来たかどうかです。

イギリスのF.F ブルースという有名な神学者はこう言います。「神の恵みに対する当然の応答は、感謝の思いであり、そこから湧き出ることばと行動は、神の喜ばれる犠牲である。」と。もし、神のすばらしい恵みを覚えているなら、その恵みにふさわしい応答は「感謝」であると。その感謝から湧き上がって来ることばと行動こそが、神の前にふさわしいささげ物であるということです。その通りだと思いませんか？私たちはそのことを見て来たのです。

神を見たヨハネ、主イエス・キリストの前で死んだようになりました。主は彼に手を当てて「恐れてはいけな。あなたは受け入れられたのだ。あなたは赦されたのだ。あなたはわたしの愛する子だ。ヨハネ、わたしの命じることをやりなさい。」と励まされました。ヨハネはそれを喜んでやっていくのです。そして、神はそれを喜ばれたのです。なぜなら、彼はその働きを正しい心をもって行ったからです。ヨハネはイエスと約3年半、この地上でともに生活をしました。寝食をともにしました。話をして、ともに笑いともに悲しんだ、そのような時間を過ごして来ました。主イエスと親しかったのです。

また、イエスはこのヨハネを特別に愛されました。それでいて、栄光の主イエス・キリストを目の当

たりにした時にヨハネは恐れを抱きました。これこそ、私たちの主に対する正しい態度だと思いませんか？私たち以上に個人的な関係にあったヨハネが、栄光の主を見た時に恐れをもったのです。私たちの中でどれだけの人がこの神に対する恐れをもっているでしょう？恐れをもっている人は罪から離れようとします。そして、今見て来たように「私はただ一つのことだけを望んでいる。この救いをくださった神が喜んでくださることを私はしていきたい！それが私の人生だ。それが新しく生まれ変わった私の生き方だ。私はこの主に感謝を表したい！こんなにすばらしいみわざを為してくださった主に。」と心から願います。

信仰者の皆さん、あなたはそのように生きておられますか？心を見てください。あなたの心が正しいかどうかを。正しい心をもって感謝の心をもって、恐れをもって、この主に従い続けていくことです。この主イエス・キリストはそれにふさわしいお方です。

《考えましょう》

1. どうして主イエスを正しく知り、常に覚えることが大切なのでしょう？その理由を書いてください。
2. 「恐れるな」と言われた主イエスは、その理由を5つ挙げられました。それらを記してください。
3. どうして主なる神は、私たちの「心」に関心を払われるのでしょうか？その理由を記してください。
4. あなたはどのようにして「試練」に打ち勝っておられますか？その秘訣をどなたかと証し合ってください。